

伝文

日本口承文芸学会 会報

第 64 号 2019 年 2 月 発行

日本口承文芸学会

〒150-8440 東京都渋谷区東 4 - 10 - 28

國學院大學文学部 飯倉義之研究室

Tel : 03-5466-0529 (研究室)

Fax : 03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-mail : info@ko-sho.org

組踊誕生 300 年

狩俣 恵一

琉球の「組踊」は、玉城朝薫が能楽を基本に創始した楽劇です。尚敬王の冊封式の 1719 年に、はじめて上演されました。組踊は、琉球の故事を素材にしていると伝えています。が、「二童敵討」は「小袖曾我」、「執心鐘入」は「道成寺」、「万歳敵討」は「放下僧」、「花売の縁」は「芦刈」などのように能と関りの深い作品が数多く見られます。

琉球の士は和歌・茶の湯をはじめ、能楽・唐楽・琉球芸能などを嗜んでいました。玉城朝薫も大和文化に通じており、島津公の前で「軒端の梅」（東北）を舞ったと伝えています。また、朝薫は数回の薩摩上り・江戸上りで歌舞伎や文楽などの町人の芸能にも接したようですが、組踊は能の所作を基盤にしており、三間四方の舞台で行われました。礼楽を重視する士の意識が、能を選択させたように思われます。

組踊本（台本）は、和文を基にした「琉球文」で記されています。次は、「執心鐘入」の主人公・中城若松が「橋掛」より登場する場面の琉歌です。

(琉歌)	(読み)	(共通語訳)
照るてだや 西に	ティルティダヤ ニシニ	照る太陽は西に（傾き）
布だけに なても	ヌダキニ ナティン	（影は）布のように（細く）なっても
首里みやだいいり やてど	シュイミヤデイ ヤティドゥ	首里（への）ご奉公なので
一人 のぼる	ヒチュイ ヌブル	一人（で）上る（歩いている）

上記の「てだ」「や」「だけに」「なても」「みやだいいり」「やてど」の琉球語は、「てだ」は「太陽」、「や」は「は」、「～だけに」は「～のように」、「なても」は「なりても」、「みやだいいり」は「ご奉公」、「～やてど」は「～なので」の意。また、□の「照る」「西に」「布」「一人」「のぼる」の和語は、「照る」はティル、「布」はヌヌ、「一人」はヒチュイ、「のぼる」はヌブルと発音すると、琉球語になります。

ただし、琉球語の西はイリ（入り）と言います。太陽は「西に入る」からです。東はアガリ（上がり）です。ところが、この組踊では琉球語の「イリ」ではなく、和語のニシ（西）を使っています。琉球の士は、和語を好んで取り入れました。和語の多用は、琉球の士の言葉の特徴でもあります。

また、琉球の士は、三線楽譜の工工四を作成し、琉歌や組踊の音楽を演奏しました。そして、琉球独自の女形の所作を工夫しました。また、独自の衣装とヘアスタイルの女性姿、脚絆に東絡げの二才姿、振袖に陣羽織の若衆姿などを考案しました。そして、それらの礼楽思想に基づく芸能は、外交の

場で行われました。江戸上りの芸能では、唐楽を中心に琉楽と二才踊り・女踊りが行われ、冊封式の御冠船踊りでは琉楽と老人踊り・組踊・若衆踊り・女踊りが中心でした。

そして、明治になると、琉球王府が消滅したので、民間の沖縄芝居が誕生しました。玉城盛重をはじめとする沖縄芝居役者は、大衆に人気の娯楽芸能を演じる一方で、王府芸能を洗練させました。言い換えるならば、土の言葉による礼楽思想の組踊は、沖縄芝居役者によって古典化されました。組踊は1972年5月15日（復帰の日）、国の重要無形文化財に指定され、2010年には世界文化遺産に登録されました。

今年は、組踊がはじめて上演されてから300年目にあたり、さまざまな記念事業が行われます。また、本学会の大会は、本年の6月1日・2日に沖縄国際大学で開催されます。ぜひ、沖縄にお運びくださり、沖縄の伝統文化に触れて下さるようご案内申し上げます。（沖縄県）

2018年11月17日 第75回日本口承文芸学会 研究例会（國學院大學）

「シンポジウム：関敬吾の口承文芸観」

報告 立石 展大（東京都）

2018年11月17日（土）に國學院大學渋谷キャンパスにおいて、第75回研究例会「関敬吾の口承文芸観」が開かれた。司会は関根綾子氏で3人のパネリストによる発表が行われた。パネリストは、野村敬子氏・高木史人氏・加藤耕義氏。野村氏と高木氏は、関敬吾との直接の交流をとおしての発表で、加藤氏からは、関敬吾の話型分類についての発表がおこなわれた。



最初は、野村敬子氏による『「関敬吾」伝説』。昭和18年頃、関敬吾は満蒙開拓少年義勇軍にむけて慰問袋に入れるための昔話集を編集した。その昔話集を満州からの帰国者に読んだか聞いて欲しいという依頼を昭和48年に野村敬子氏が受けたのが、お二人の出会いである。しかし存命の人は見つからなかった。満蒙開拓少年義勇軍に向けては、「お母さんの臭いがする女性の昔話を選んで」送ったという。とても優しい人柄が偲ばれたとのこと。ただ、出会う前の野村氏は、関敬吾が「東のライオン」と呼ばれていたのを耳にしていた、緊張したという。その研究手法は科学的で誰がスイッチを押しても電気が付くように、同じ結果が出ることを心掛けた。そして昔話のあり方が世界に通じて、一つの国で孤立しない視野を大切にしたい。また、関は『日本昔話名彙』を手伝ったが、柳田國男は少しもそのことに触れていなかった。関はそれが応えたので、著作協力者には配慮したという。野村氏からは「関先生」という呼び方を通された敬意が払われた発表だった。

次は、高木史人氏による「母と子との民話」。高木氏は関敬吾逝去の折、訃報を各新聞社に送っている。その高木氏が、2007年と2012年に長崎県の富津にある関敬吾の生家跡を訪れた時の写真を提示されながらの発表だった。関敬吾は漁村の網元の家に生まれ、近隣に六角井戸や弘法伝説などが伝わる環境で成長した。富津で鯖漁をしている漁師さんから新潟のほうまで漁に行った話も紹介された。このあたりも、海外へと向いている関敬吾の研究視点を彷彿とさせるスライドだった。そして、この故郷での伝統的な物語は「伝説（大人伝説）」「むかし（灰坊太郎）」「はなし（馬鹿賀・馬鹿嫁譚）」の三つであり、「原郷」から捉えれば、関にとって「民話」という言葉は、この三つで

あったことが述べられた。さらには、関の伝承経路を踏まえ、女性から女性への伝承ばかりでなく、母親から息子や、父親から息子への経路なども踏まえて、口承文芸を捉えるべきであるという提起がなされた。また『島原半島民話集』に対する柳田國男の酷評ともいえる序文や、後に再話を容認して柳田との考えの違いを見せる関の考えに、両者の緊張感も表れていて興味深い発表だった。

最後は、加藤耕義氏による「関敬吾による日本昔話の分類」。加藤氏は、ハンス＝イェルク・ウター著『国際昔話話型カタログ 分類と文献目録』の翻訳を近年されている。その昔話の分類に精通している加藤氏により、関の昔話分類の分析が行われた。関敬吾による日本昔話の分類整理は、大きく2種類に分けられる。一つは、『日本昔話集成』(1950-1958)とそれを引き継いだ『日本昔話大成』(1978-1980)。そして、もう一つは、『日本昔話集成』第6巻(1958)所収の「日本昔話の型」と、それを基に作成された英語版の“Types of Japanese Folktales”(1966年)である。英語版編纂の目的は国際的に知られていなかった日本の昔話を海外に紹介したいことからだった。しかし、集成の分類にしたがって紹介しなかったのは、「日本昔話の型」が、執筆時点における関の昔話理解と分類に最も沿っていたためという。しかしその後、大成を編集する時点で集成を引き継いだのは、既に多くの人が集成を基にして研究を進めていたことが理由であった。当日配付された資料には、大成と「日本昔話の型」の分類比較が丁寧に提示されており、関敬吾の分類に対する考えの変遷が明確になる発表だった。

フロアには、関のご子息である信夫氏もいらっしゃった。家では1日、14、5時間も机に向かっており、疲れて気が向くと話をしてくれたことや、春先に庭に近所の子どもが来れば、その子どもたちにも語っていた様子も思い出話として紹介された。絵本を書くのは好きではなかったことや、学問をやりたいが、食うための学問はしたくないと言っていたことも語られ、人柄を偲ぶ貴重なエピソードを伺えた。

また、会場の後方には、関敬吾直筆の原稿や、昭和20年代に出版された昔話集や絵本の著作展示もあり、とても充実した研究例会となった。

各地の語り・語り手・語りの場の紹介(第8回)

杉 栄子・中島 昭子(東京都)

◆渋谷民話の会

「渋谷民話の会」は今年20周年を迎えました

平成10年(1998)渋谷区社会教育課の主催で、民話の講義が始まり、終了後に受講生の有志が自主グループ「氷川民話の会」をスタート、更に活動を本格化する為に、全国に名前が知られている故里渋谷を名乗り「渋谷民話の会」と改称し、当初より口承文芸の専門家でいらっしゃる國學院大學の野村敬子先生のご指導を受けて現在に至っております。

長く過去から伝承されてきたお話の数々を、現代によりみがえらせ次の時代に、語り継いで行きたいと続けています。定例会の折には、初代水沼キク会長が教えて下さいました、明治時代の「桃太郎」の唄

桃太郎の歌

1. 桃から生れた桃太郎 気はやさしくて力持ち
鬼が島をば討たんとて 勇んで家を出かけたり
2. 日本一のきびだんご 情けにつきくる犬と猿
きじももろうてお供する 急げものどもおくるなよ
3. はげしい戦さに大勝利 鬼が島をば攻めふせて
取った宝はなににぞ 金銀さんごあやにしき
4. 車につんだ宝もの 犬が引き出すえんやらや
猿が後押すえんやらや 雉が綱ひくえんやらや

と踊りを全員で楽しみ、滑舌の練習に北原白秋の「アイウエオの歌」や歌舞伎十八番の「外郎売り」などを取り入れています。行事に参加するための語りや、持ち話の練習もその折々に合わせて行ってきました。年2回、訪ね歩きの日を作って、会員有志が区内に残されている昔話や伝説の史跡、事跡を訪ね検証して、生き返らせて来ました。何と言っても野村先生のもとに、常に和気あいあいと有り続けたことを、誇りに思っております。

渋谷民話の会の発足から今日までの歩み

・平成9年（1997）、渋谷区社会教育課の主導により、渋谷区千駄ヶ谷社会教育館に於いて國學院大學 野村純一教授他による民話入門の講座が開かれました。

・平成10年（1998）、高齢者の為の勉強会の一環として、国学院大学説話研究会の野村敬子先生ご指導による。第1回「21世紀に語り継ぐ民話の心」6/5～7/31全10回（氷川区民会館）

・平成11年（1999）、第2回「ふるさと渋谷の民話をさぐる」5/31～7/26全10回（恵比寿社会教館）

・平成12年（2000）、第3回「共に民話を語りませんか？」6/1～7/27全10回（恵比寿社会教育館） 以上のように1期10回3年シリーズで、民話についての講義がひらかれました。

同年、上記の講義を受けて、民話への興味を触発された人たちが、その後もっと勉強を続けて、特に都会の民話を掘り起こそうと「渋谷民話の会」を立ち上げ活動を始めました。日本の各地方には、人から人に語られて来た昔話が数多く残され、それらが心の拠り所として綿々と伝えられてきました。一地方に過ぎなかった渋谷も、今では大都会に組み込まれて、伝説や昔話の世界とは遠くかけ離れた存在のようになりました。しかし、その多くが現在も根強く生活の中に生き残っているのでは？と考え、次の時代につなげようと此の会を始めたのですが、その志は今も失っておりません。

20年間の活動のおもな記録

・平成13年（2001）、第1回「渋谷むかし語り・21世紀の孫たちへ」を発刊

・平成15年（2003）、第2回「渋谷むかし語り・区民が紡ぐ昭和」を発刊

第1回、第2回とも、渋谷区社会教育課の主催により、野村敬子先生が編集を担当、刊行されました。区内小学校、図書館などに、寄贈しました。

同年、「子供ゆめ基金助成金」を申請、許可されましたので、各種イベントを企画、実行しました。フランス、トルコ、カンボジア、アメリカ、中国（香港）、韓国、日本の大学生、社会人から各国の民話や生活習慣など、お話を聞く会を開き、子供たちと交歓しました。殊にカンボジアの方には、民話の他、幡代小学校で料理教室を使って、実際に調理の指導をして頂きました。

・平成17年（2005）、渋谷のNHKスタジオから、深夜便で「渋谷の民話」を全国放送。渋谷の民話の内、10話を11月20日、11月27日の2夜に渡り放送しました。

・平成19年（2007）、同年より毎年、渋谷金王八幡宮の祭礼時に、神楽殿において「語り」を奉納しています。



・平成20年（2008）、同年より毎年テーマを決めて開催しています。

会場 塙保己一資料館

主催 公益社団法人 温故学会（理事長齋藤幸一）

後援 渋谷区教育委員会

講演者 国学院大学 語りと伝承の研究会／渋谷民話の会 会員／聞き耳の会 会員

指導 野村敬子先生

因みに本年のテーマは「平和」でした。（平成30年10月7日）

・平成22年（2010）、渋谷文化総合センター大和田オープン。会場祝いに渋谷の民話を会員が語りました。

4月「アースディ・いのちの森」明治神宮みどりの広場で、渋谷の民話を語る。

12月「フェスタ原宿」神宮前小学校で、渋谷の民話を語る。紙芝居上演

・平成30年（2018）6月、日本昔話学会が高千穂大学（杉並）で開催されました。ベトナム民話「山ウズラになった男の子」石井和子／「カンボジアについて」カンボジア政治難民のワンディ氏／カンボジア民話「ウサギとヤドカリ」紙芝居 杉栄子・中島昭子

改めて20年間を振り返ってみましたが、色々楽しい事が沢山ありました。初代会長が97才から103才まで務められ、現在も98才の語り手を筆頭に、89才、86才、そして現会長沼尻順之助氏も85才と、正に超高齢社会の象徴のような会ですが、これからも力を併せて民話を、次代につなぐ活動を、会員一同、続けて行きたいと思っています。

尚、本来は語りの会ですが、民話に登場する昔の道具や言葉が、理解出来ないことが多くなり、更に映像社会で育った昨今の子供たちには、人の話をじっくり機会が少なく、耳からだけで聞く語りが伝わりにくい状況にあります。其の為、渋谷の民話を主に、紙芝居に仕立て直して利用しています。

1. 金王丸誕生の池 （金王八幡宮）
2. 富士山と八ヶ岳 （千駄ヶ谷鳩森八幡宮の富士塚から）
3. 雨ごいの龍 （本町清岸寺）
4. 塩かけ地蔵 （東福寺金王八幡宮となり）
5. 笄橋（白金長者と渋谷黄金長者から）
6. 塙保己一（温故学会）
7. 妙円寺の狸のお汁粉（原宿）
8. お仲だんご（千駄ヶ谷）
9. ハチ公（渋谷）
10. ウサギとヤドカリ（カンボジア昔話）



活動日：毎月第2火曜日13：30～17：00 渋谷区リフレッシュ氷川（渋谷区東1丁目26-23）

事務局便り

○寄贈書籍(2018 年 7 月以降拝受)

- ・梶濱亮俊『『サキヤ格言』とインドの説話』テクネ 2017 年 6 月
- ・神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』
第 50 巻 10 号～12 号 2018 年 1 月～3 月・第 51 巻 5～9 号 2018 年 8 月～12 月
- ・神奈川大学日本常民文化研究所『歴史と民俗』34 平凡社 2018 年 3 月
- ・国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』
第 207～212 集 2018 年 2 月～12 月
- ・国立歴史民俗博物館『わくわくする研究を歴博で!』vol.1 2018 年 3 月
- ・斎藤英喜『折口信夫 神性を拡張する復活の喜び』ミネルヴァ書房 2019 年 1 月
- ・鈴木岩弓・小林隆(編)『柳田國男と東北大学』東北大学出版会 2018 年 4 月
- ・丹菊逸治『アイヌ叙景詩鑑賞 押韻法を中心に』(アイヌ・先住民族言語アーカイヴ
プロジェクト報告書 2018) 北海道大学アイヌ・先住民研究センター 2018 年 8 月
- ・奈良県立民俗博物館『奈良県立民俗博物館だより』Vol.43No.1 2018 年 3 月
- ・新潟県立歴史博物館『新潟県立歴史博物館年報』第 17 号 2017 年 10 月
- ・新潟県立歴史博物館『新潟県立歴史博物館研究紀要』第 19 号 2018 年 3 月
- ・日本民俗学会『日本民俗学』第 296 号 2018 年 11 月
- ・藤井貞和『非戦へ 物語平和論』水平線 2018 年 11 月

○日本口承文芸学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東 4 - 10 - 28 國學院大學文学部 飯倉義之研究室

Tel: 03-5466-0529 (研究室) Fax: 03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、
学会HP (<http://ko-sho.org/>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。
入会金なし、年会費 4000 円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。